第451号 昭和58年 1 月 20 日発行（毎月 20 日発行）
昭 和 49 年 8 月 31 日 第 三 種 郵 便 物 認 可

1983年（昭和58年）
1月号（No. 451）
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150円

目　次

昭和57年度年次晩餐会 ……（1）
海外の山では
1982年の登山活動　片山全平 ……（2）
ボゴダ第二峰登頂　浅川とみ子 ……（2）
東西南北 ……（4）
“紅葉会参加の記”“十文字峠から三国峠へ”“故秩父宮雍仁親王殿下三十年祭”
南アルプス・スーパー林道を踏む　自然保護委員会 ……（4）
科学研究委員会第15回講演会
「同時登攀中の確保の科学」　中川和道氏 ……（5）
追悼　小島栄氏，前田浩氏 ……（6）
図書紹介 ……（7）
「山の画文」「チベット研究文献目録」「神秘な国ネパール」「世界の秀峰」
日山協推せん状取得手続き ……（8）
報告　集会委員会 ……（10）
お知らせ ……（10）（11）
ルーム日誌・会員移動 ……（11）

▶日本山岳会事務取扱時間
月，火，木，土曜　10時～20時
水，金曜　13時～20時
日曜・祭日は休み
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日　13時～20時
▶2月19日（土）は図書室休み

昭和五十七年度年次晩餐会

――名誉会員に麻生武治氏ら四氏を推挙――

さる十二月四日（土）、恒例の日本山岳会年次晩餐会が開催された。

会場は、毎年行なわれてきた新宿「京王プラザホテル」から都心の紀尾井町「ホテル・ニューオータニ」に移され、ローズの間で開かれ、出席会員数三七二名と例年にないもり上がりを見せた。

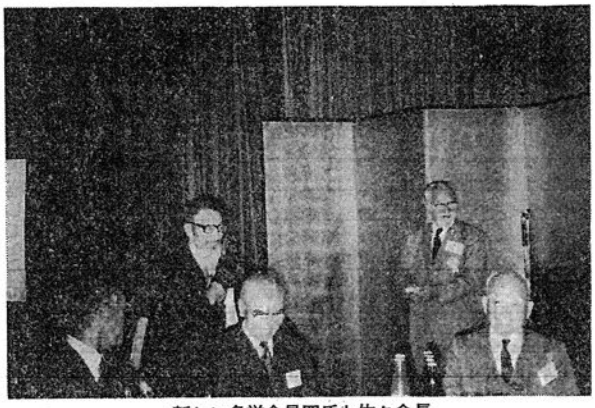
本年はまた特に地方会員の便宜を計って会場入口には案内所が開設されたり、茗渓堂の厚意による先着順三〇〇名に『山日記』が配付されるなど既に開会前よりなごやかな雰囲気に満ちていた。

また会場には事前に役員、委員などがリボンをつけテーブルマスターとして各机に一、二名ずつ座り、会員間の交歓のしやすいように配慮したのも昨年同様であった。

年次晩餐会は午後六時より神崎忠男総務担当常務理事の名司会により開始され、まず最初に佐々保雄会長が挨拶に立った。

佐々会長は、年々盛んになる本会の活動や海外登山、UIAAなどの海外交流の成果を喜ぶとともに、一九八四年に迎える本会の創立八十周年記念行事に対して会員各位の協力を要請した。

ついで、神崎常務理事が会務報告を行なった。それによれば、現在の在籍会員は三七五〇名、本年度の入会者は一九八名、退会者一五名、会費納入率六八％、また現在の一番新しい会員番号は九二四六番であると報告された。



新しい名誉会員四氏と佐々会長

物故者は本年度一九名。西村政晃財務担当常務理事よりその名前が読み上げられ、全員で冥福を祈って一分間の黙祷が捧げられた。

続いて名誉会員の推挙と永年会員の発表が行なわれ、佐々会長よりそれぞれ名誉会員章と永年会員章が贈られた。本年度の名誉会員は麻生武治（会員番号五二一九）、野口末延（八〇六）、中屋健式（一二四七）、竹節作太（一六九六）の四氏で、永年会員は渡辺武男（一三六一）、初見一雄（一三九六）、増本茂（一四〇五）の三氏であった。

まず、名誉会員を代表して中屋健式氏は、

「私は初登攀という輝かしい記録も、本会の役にも立っていないので名誉会員には価しないが、ただ古い会員で、一九三一年の夏、たまたま清水トンネルの貫通に当ってその初通過をしたという面白い経験をしていたので、それを入会申込書の山歴に書いたら、藤島敏男さんが、お前は珍しい初の山くぐりの記録を持っている、ということで入会が許され、以降ずっと山くぐりを続けてきた」と諧謔の中に喜びの挨拶をして満場の拍手を浴びた。また、永年会員章は五十年以上の在籍者に贈られるが、その新永年会員を代表して挨拶に立った初見一雄氏も「こんなに多くの会員が集まるのはどこかが狂っている。これは盆と暮にわけて交代で交流を計った方がよい。また現佐々会長のあだ名は〝ノートルダム〟であった」などの珍提案、珍披露を行なって、これまた満場の拍手を受けた。

次の行事は鏡割りで、これは秋田支部の有志より送られた銘酒「出羽の富士」の四斗樽。出席最古会員番号の名誉会員辻荘一（四八七）と最新会員番号の坂下直枝（九二四五）の両氏の手で行なわれ、記念品の一合枡にその酒がそそがれ全員に配られた。

乾杯の音頭は、元会長の今西錦

山をきれいに　ゴミは持ち帰ろう

留守番電話（電話番号234―六八五九）

司氏が指名されが、今西氏の提案により急拠、あと数日で九十三歳になるという最長老の平沢亀一郎氏によって高らかに三度乾杯の音頭が唱えられた。

その後、会食に入り、それぞれのテーブルマスターの指示によって、昨年と同じように各テーブルごとに自己紹介、卓上山談・交歓が行なわれ、そのあと席を立っての広い交流となり、会場は転じて賑やかになった。

その賑わいの交歓の輪がひろがるなかで、学生部が五年計画で行なっているボゴダ峰の第一回鹿野隊長、第二回磯野隊長、日山協隊のチョゴリ峰（K2）今井田研二郎総隊長、登頂者の坂下直枝隊員、今度開放されたブータンの山、ジチュドラク峰に挑む田部井淳子隊長と北村節子隊員、今年度の叙勲者フォスコ・マライーニ氏（勲三等）と高橋定昌氏（勲四等）、異色な韓国の孫会員、日本初のヒマラヤ遠征隊、立大・ナンダ・コート隊の堀田弥一隊長以下の面々、とそれぞれ多彩な紹介と挨拶が次々に行なわれていった。

次いで、これも恒例となった全国十九支部並びに支部長の紹介となり、北は北海道（大塚武支部長）から南は熊本（西沢健一支部長）まで、司会者に順次呼ばれるとそれぞれの出席支部長と支部員が手を振り盛大な拍手に応えた。更に新しい会員に期待するという趣旨で昨年より実施してきた新入会員の紹介が行なわれた。まず年次晩餐会に出席した九〇五七番以降の二十五名の氏名が読み上げられ、全員のあたたかい拍手のうちに前列に並んでもらい渡辺兵力副会長の歓迎の辞があり、それに応えて新入会員を代表して荻原賢司会員（九〇八九）が力強く挨拶を行なった。

定刻をかなりまわって、全員が肩を組み輪になっての「雪山賛歌」が山口節子会員のリードで合唱された。そしてこの周囲に轟く高らかな歌声が、昭和五十七年度日本山岳会年次晩餐会のフィナーレを飾った。

最後に神崎常務理事より、この年次晩餐会の準備を担当した各役員、委員の紹介があり、吉沢一郎名誉会員の発声で万歳三唱、閉会となった。

出席会員達はまだまだ名残りを惜しみそれぞれ旧交を暖め合いつつ、名札と引換えに新しい『山岳(第七十七年)』を手にして、それぞれ家路に、あるいは二次会にと、珍しく暖かい師走の東京の夜の中に散って行った。

なお、本年度で特筆すべきことは、地方会員との交流を更に深めるため、この年次晩餐会を中心にその前後にわたって種々の行事が企画され実施されたことである。その概要は次の通り。

・十二月四日（土）ホテル・ニュ

――海外の山では――

一九八二年の登山活動

片山全平

'82世界登山界での圧巻は日本山岳協会隊のチョゴリ（K2）北壁登頂であった。一八八七年ヤングハズバンドの初期探査行、五十年後の一九三七年のシプトン行、そして四十五年後の今回の隊。第一、二次大戦を挟んで繰り出されたチョゴリ北面への執念は約一世紀を経てその全容が明らかにされたことになる。さらに八三年はイタリア隊が試みるが、単にチョゴリだけではなく、カラコルム山系北面の広域な未知の部分が解明、登山対象としてもその場を拡げることになる。

さらに中国領での登山活動をみると、チョモランマ新ルート東北東稜の英ボニントン隊は、残念ながらタスカー、ボードマンという逸材を失って、また米の北壁隊もマーティ・ホーイ女性隊員を捧げてともに断念している、米は二年続きの失敗となる。この後オランダ隊（フェリン・スチュアルト隊長ら十八人）も天候に恵まれなかった。シシャパンマでは英スコットらによる南壁初登攀がアルパイン・スタイルで行なわれた。京大学士山岳会（近藤良夫隊長）のカンペンチン（七二八一㍍）、大分県岳連隊（伊藤享隊長）のシシャパンマ西峰（七二九二㍍）、英学生隊（ジョナサン・ステファン・リー隊長）のコングール姉妹峰（六二七〇㍍）、立正高校隊（金森昭雄総隊長）のボゴダ山群無名峰（四三〇四㍍）、JAC学生部（磯野剛太隊長）のボゴダ第二峰（五三六一㍍）の各初登頂がある。中国は八二年には大規模な未踏峰最高のナムチャバルワ（七七五六㍍）学術探検隊が繰り出され、初登頂への足固めを行なった。また高山研究所シシャパンマ登山隊（原眞隊長）の富田雅昭は、三日間の無酸素登頂に成功している。

ネパールでは、メスナーがプレのカンチェンジュンガ北壁をおとし入れ、そしてカラコルムに転じて、ガッシャブルム第二峰とブロードピークを同時期連続登頂の離れ技をやってのけた。これで八千㍍峰九座、通算十一度目の登頂となった。

プレのエベレストではソ連が南西壁西寄りルートから第五次まで登頂者を送って宿願を果たした。同峰のポストではカナダ、スペインが同時登頂を試みた。カナダは最初サウスピラーにルートを求めたが七人の死傷者を出して南東稜に転進して成功、スペイン隊はその朗報は聞かれない。バリエーション登攀ではカモシカ隊（佐々木徳雄隊長ら十八人）のポストのダウラギリ北西稜（ペアルート）が断然光っている。またマカルーではポーランド隊のアンジ・ホック隊員の西壁単独行、山学同志会（湯田一男隊長）の北稜登攀もある。大阪労山のプルビ・チャチュ（六六五八㍍）、名大隊のランシサ・リ（六三〇〇㍍）、東京都庁隊のオンミ・カンリ（七九二二㍍）などは初登頂であった。ただオンミ・カンリの高度には疑問があり、金子利三隊長によると七四〇〇㍍と推定、正確な高度は今後の問題点として残した。

◇

ボゴダ第二峰登頂

浅川とみ子

七月二十八日、後発隊として成田を出発。北京、ウルムチと経由し、汽車で北京を先発していた隊長以下十一名と連絡官に合流する。そし

ーオータニ（楓の間）で午後二時三十分より「講演と映画会」が開催された。内容は立教大学ナンダ・コート登山隊の記録の講演（講師＝堀田弥一氏）と映画の上映で、会場にはその当時の資料も展示され、出席者一五七名と盛会であった。

・十二月五日（日）ルームにて午前九時三十分より「支部懇談会」、また三水会と婦人懇談会による「山歩き」（高尾山と鹿倉山）も実施された。

（小倉　厚）

（名誉会員紹介）

麻生武治氏　明治三十二年（一八九九）十一月東京生。ドイツ体育大学卒。一九二二年舟田三郎氏と槍ケ岳北鎌尾根登降。翌年、ツムット稜からマッターホルン、モンテ・ローザなどを登攀。一九二四年舟田氏らと厳冬の槍ケ岳登頂。前後三回冬季オリンピック大会にスキー選手兼監督として派遣された。一九二六年、グロース・グロックナー、ビーチホルン登攀。ヨーロッパ・アルプスでは冬のグリンデルワルトに槙有恒氏と過ごしたり、松方三郎、浦松佐美太郎氏らとも共に登った。一九三一年藤木九三氏と厳冬の樺太突岨山（氷点下三〇度）へも登った。著書に『山岳大観』（各務良幸氏と共著）、『銀嶺を行く』、『我がスキーシュプール』等がある。

大正六年（一九一六）六月本会入会、会員番号五二九。但し戦前一時会籍をはなれ戦後復活した。

野口末延氏　明治三十一年（一八九八）十二月東京生。小学校二年のとき相州大山に登り、爾来現在まで各地の山々に足跡を印した。山崎金次郎氏との縁で霧の旅会に入会。木暮理太郎、武田久吉氏らの薫陶をうけた。大正十五年松本善二氏らと谷川岳連峰の初縦走。八十歳を超えて今日なお登山を続けている。

大正十一年（一九二二）四月本会入会（紹介者は前川満寿雄氏）会員番号八〇六。昭和十三年～十六年理事、さらに戦後はしばしば監事として会務に尽くした。昭和四十七年永年会員。

中屋健弐氏　明治四十三年（一九一〇）十二月北九州市生。東京帝国大学文学部卒業。谷川岳周辺及び北海道の山に足跡が多い。松方三郎、藤島敏男、成瀬岩雄氏らと共に登った。アメリカのマウント・レーニヤ登頂。またアメリカ学会、ラテン・アメリカ学会、日本ペンクラブの会員としても活躍した。

昭和五年（一九三〇）十月本会入会（紹介者は成瀬岩雄、松方三郎、三枝守博氏）会員番号一二四七。昭和十一年以降、多年理事、副会長として会務に貢献した。昭和五十五年永年会員。

竹節作太氏　明治三十九年（一九〇六）四月、長野県下高井郡山の内町生。早稲田大学商学部卒業。大阪毎日新聞社に勤務し、スキー山岳記者として活躍。一九三六年立教大学のナンダ・コート遠征隊に参加、隊員と共に初登頂に成功。一九五二年秋マナスル踏査隊、一九五三年第一次、一九五四年第二次マナスル登山隊に参加、活躍した。国内では、一九三六年頃、厳冬にアイヌの老人と雌阿寒岳に登ったことがある。著書に『ナンダコット登攀』、『山に生き

て七月三十一日、あわただしくキャラバンに出発。当初の計画では、大東沟より入山となっていたが、将軍沟の方には日中友好登山隊が入っているとのことで、隊長の粋な計らいで、こちらから入山し、大町山の会の旧知の山仲間に会うことができました。

八月四日夕方、チゴ氷河の末端にBC（三三五〇㍍）を建設。BCの建設と同時に雨と雪、強風にたたられ、三日間休養をやむなくされました。大型の炊事用テントは夜たたんでおかないとつぶされてしまうという有様。食事当番の朝などは早くも弱音が頭の中を通り過ぎました。しかし八月八日からは好天に恵まれ、順調にルートも延びました。

八月八日は全員でC1予定地（四二五〇㍍）までの荷上げとルート偵察。

八月九日～十一日は、ルート工作隊の仲間に入り、相馬、山本、平形という三名の大学生に混じり、固定ロープの安全確認に出掛けました。

BCよりC1に上がればC1生活が至極快適、BCには下りたくないと思いました。結果的にはこの三日間で、固定ロープ十三本（一本は五〇㍍）を張り、その後、BC→C1とC1→C2の荷上げ夫々一回ずつしただけで登頂となってしまいました。

八月十六日は隊長みずからC2建設（四九五〇㍍）。

八月十七日は風雪強く沈澱。

八月十八日、ルート工作しながら頂上に立とうと目論んでいた隊長ら二人は、一七時一〇分ボゴダ第二峰の初登頂をなしとげました。

八月十九日、私は第二パーティに入れていただき、平形、山本、和田の四名でC2入りをしました。

絶壁に作られたC2が、矢張り異国の山を感じさせ、また厳しさをも感じさせてくれました。

八月二十日、日頃の心がけが良いせいか、無風快晴のこれこそアタック日和り。足取り軽くボゴダ第二峰（五三六二㍍）の頂上へ。一二時三〇分ころ立ちました。頂上に立つ時はトシの順にどうぞと言ってくれる心遣いがとても嬉しかったです。

この日はC1まで下り、翌日BCに下りました。

八月二十一日第三次、八月二十三日第四次と四パーティに分かれ全員登頂することが出来ました。そして八月二十四日、全員がBCに集結しました。

その後、学生を中心に五パーティに分散し、山域の踏査活動を行ない、全員無事に八月三十日、ウルムチへ下山しました。

（学生部）

＊

なお、三年目のボゴダ山群登山計画は、目下関西支部を中心に募集中ですので、参加希望の方および興味のある方は、一九八三年二月末日頃までにJAC関西支部か、日本山岳会ルーム宛にご連絡下さい。若い人達を中心に情熱のある方でしたらどなたでもお出で下さい。

（磯野剛太）

る』など多数がある。

昭和十二年（一九三七）三月本会入会（紹介者は石川欣一、宮崎武夫氏）会員番号一六九六。評議員として会務に尽した。

合戦尾根よりの槍／信濃支部・田中弘美会員提供

第二十五回 紅葉会参加の記

関口　周也

静岡支部からの案内によれば、まだ寸又温泉がなかった頃の昭和三十三年に静かな光岳の登山基地であった大間部落で、東京から日高信六郎、神谷恭、折井健一、松本熊次郎、小原勝郎、浜野正男、田口三郎助、佐藤佳年の諸氏が参加して会合が開かれたのが最初であるという。以来二十五年、毎年秋に開催され、その間、前記各氏のほかに松方元会長、藤島敏男さん、霧の旅の会の方々等、多くの先輩諸氏が常連、参加して、この集りを一層、盛りあげ、実りあるものにした。おそらく、一地方支部が主催する行事としては、その長さ、内容からいって出色のものといえよう。

今回、山本支部長から案内を頂き、この行事に初めて参加する機会を得た。

十一月十三日の当日は、雪を頂く富士山に迎えられ、富士川を渡るときには、はるかに荒川三山を望むことができるほどの好天であった。静岡駅前で受け付けと同時に樹令二十五年（第二十五回に因んで）という茶の木を薄く輪切りにして作った名札を渡され、各自、首から胸にぶら下げる。

この集りは、五回目にして、一〇〇名を越える参加者があった、とのことであるが、今回も八十一名の多くの参加者があって、大変賑やかであった。その中に、佐々会長や第一回の参加者である浜野正男さん、佐藤佳年さん等のお元気な姿があったことは何よりも喜ばしいことであった。

バスは十一時三十分に静岡駅をあとにする。車中では山本支部長がガイド役、かつて会報に寄稿された論文「南アルプスと人間」等により同氏の博学なことは知られるところであるが、皆が聞き入るほどの名ガイドぶりであった。

バスは安倍川に沿って北上し、六番から、その支流、西河内川に沿って登る。つづら折りの急坂を登り切ったところが富士見峠で、ここには井川部落の人達が路上に出店して、山芋とか、わさび等この地の産物を売っていた。下車／

――自然保護――

南アルプス・スーパー林道を踏む

自然保護委員会

南ア・スーパー林道の建設をめぐって自然保護の立場から反対運動がおこり、結局は一般車の通行を認めない林業専用の道路として建設が許可されたのは、もう何年か前のことである（完成は五十四年十一月）。今年になって、以前から問題となっていた奥鬼怒スーパー林道が、またも全く同じ条件で建設が許可されたことから、南ア・スーパー林道のその後がどうなっているかを知りたいと言うことになり、六月二十六、七の両日、一行十二名で伊那郡長谷村から北沢峠を訪れた。

午後二時すぎ、伊那駅を下りた一行を出迎えて下さったのは、長谷村の浦部落で仙丈岳を眺めつつ自給自足の生活をおくっておられる名誉会員、交野武一氏で、氏のご案内で早速、長谷村々営の仙流荘（戸台口）に向かう。

その夜は、交野氏をかこんで昔の山の話から昨年のエベレスト明大隊の隊長としての経験談、あるいは過疎村での自給自足の生活を通しての人生談議などに、一同、時間のたつのを忘れて耳を傾けた。とくに戦争中の反英米運動から守るために、上高地のウェストン師のレリーフをリュックサックに入れてこっそり東京に持ち帰った話や、十数年前の富士山の観光用トンネルケーブルの建設案に対して、遠くアメリカの自然保護団体から「富士山は日本人だけのものにあらず」と抗議を受けて、建設反対の運動に力を得たことなど、自然保護のあり方にも教えられることが多かった。

翌朝、長谷村々営のマイクロバスで、北沢峠に向かう。殆どが登山客と観光客で、林業関係の人はいなく、この道路が実質的には観光道路であることが確かめられた。北沢峠までの道は急傾斜の山腹を縫ってつくられており、あちこちに道路の建設で惹き起こされた崩壊のあとがみられ、建設後の崩壊は今もなおつづいていると見受けられた。このことは事前調査で十分に予測された筈である。交野氏は、この道路は観光道路としてしか価値がなく、しかもその補修のために子孫に多大のつけを残したと指摘されたが、われわれも全く同感であった。

北沢峠の昔ながらの長衛小屋で湯茶の接待をうけたのち、時折り降る小雨の中を仙水峠までの散策をたのしみ、芦安村のマイクロバスで広河原経由、四時半甲府に出て解散した。二日間にわたって、全く充実した自然保護のあり方を考えさせられた山行であった。

出席者　交野武一、織内信彦、渡辺正臣、國見利夫、木名瀬亘、松本恒広、近藤緑、麦倉啓、遠

して小休止、あれこれ試食する。

富士見峠からは高原上を走るようになる。宿舎である井川少年の家の裏手の林道で全国自然保護集会に出席する人達が下車する。この集会は、JAC自然保護委員会が、同じ井川少年の家で開催するもので、その設営を静岡支部が担当した、とのことであった。

バスは、なおも登り続け、これ以上は道が悪くて行けない、というところへ来てストップ、全員下車する。荒川岳、赤石岳、聖岳の雄姿を間近に見ることができる高原地帯で、井川湖は、はるか眼下にあり、自然保護集会の準備のために途中下車してしまった山本支部長に代って、静岡の石間信夫さんが、山々を詳細に説明してくれる。石間さんは、この地方の山のほとんどを登りつくし、谷や沢をも次々に踏破している大ベテランであることを、あとで知った。

各自、思い思いに付近を散策する。雲間からもれる午後の陽光が周囲の山々を映し出し、水墨淡彩の画をみるようで美しかった。二時間近くバスに揺られ、少々不快だった身体は、またたく間に恢復し、気分爽快になる。バスに戻り宿舎に着いたときは、夕暮が、この高地にも忍び寄る頃であった。

夜は、佐々会長、山本支部長、長島井川山岳会々長の挨拶があり、仲西政一郎さんの音頭で乾杯、夕食となる。特製のおでん、この集会のために作っておいたという正真正銘のワサビ漬等の心ずくしのお料理が、所せましと並べられてあった。酒が入っての歓談が深夜にまで及んだことはいうまでもない。

次の日も快晴で、井川湖の背後の山々が赤く染まる朝を迎える。記念撮影のあと、口坂本へ向け出発する。大日峠までは尾根道の登りで、このあたりまでは、少年の家の滞在者が歩くとみえて指導標等が完備しているが、峠の頂上から口坂本までの下りでは、指導標をほとんど見かけなかった。静岡の人達は、この道を旧道と呼んでいたが、林道が出来たために、この登山道は廃道化して、あまり人が歩かないようだ。あるところは熊笹が道を覆い、またあるところは潅木が道を塞いでいるが、それがかえって自然の趣きを呈していてよかった。林道のお陰で登山道に自然が戻った、そんな感じの山道であった。

口坂本は、山の斜面に茶畑がよく開墾され、柿の木が点在する静かな山村である。静岡市営の温泉浴場があるが、俗臭は全くなく、よいところである。ここでは静岡支部の望月さんが温泉の入浴券を用意して待っていてくれた。

山村というのは、何かもの寂しい感じがするものだが、ここにはそれがない。よく育っている木々

（文責・沢井政信）

藤光男、松沢節夫、佐竹春江、沢井政信

〈委員会報告〉

科学研究委員会第十五回講演会

昭和五十七年十一月五日（金）
午後六時半～九時
山岳会ルームにて

同時登攀中の確保の科学

講師　東京大学教養学部
中川和道氏

概要　同時登攀中に用いられる確保技術には、現在確実なものがまだ殆ど無い。ザイルを結びあってはいても、少なからぬ不安を抱いた体験をお持ちの方も多かろう。本日は、同時登攀中の確保方法に関する最近の研究の現状を概観し、次に力学的に実用可能な確保方法はどのようなものであるかについて考える。

A、確保方法研究の現状（詳細は雑誌「山と仲間」に連載中の講演者の所論参照のこと）現在十種類以上の確保方法が提案・検討されているが、いまひとつ決定版と言い切れるものが無く、いわばそれらの全てが開発途上にあるといえる。これらの中では大阪府岳連方式（「岩と雪」57号および68号）が最も多くの試行実験の積み重ねを有し、その有効性も実地に把握しやすいので、とりあえず実行されることをお勧めしたい。

B、力学的解析　先ずいえることは固定確保によっては安全な確保はできないので、必ずランニングビレーの方法をとるべきだということである。次に力学の計算を行なうに当り、諸種の実験から、次の条件を満たすことが基本的に要請される。①制動力は約百Kg以下におさえること。②体重は装備を含め約八十Kgとする。③動摩擦係数は滑り易い装備の場合も考え、下限の〇・三という値を使用すること。

さて前述Aの約十種の確保方法につき、体で直接ショックを受け止める場合と、ピッケルを中間支点として用いたのちに体でショックを受け止める場合とに分けて考察しよう。前者の場合、ザイルをピッケルと共に握り込むことにより、雪面方向に対し直角に約十三Kgの力がでる。しかし斜度が四七度以上になると、雪面と確保者の体のなす角度が二〇度以下となって確保し難くなる。したがって、この場合斜度四七度付近が同時登攀可能な一応の限界となる。

後者のピッケルを支点に用いる場合、ピッケルにかかる力の最大値は制動力の二倍程度になる。この意味でピッケルが安定な中間支点として作用するよう、軟雪中では自分のトレールの底の雪が周囲より固いことを利用するなど、様々な工夫が必要である。

C、同時確保法の将来　同時登攀中の確保技術は、現在の登山技術体系全体の中でも未開拓であるため、この分野の技術開発が発展を遂げるためには、研究を行なっている人々相互の交流が必要である。同時に意味のある実験データの蓄積されることも重要である。この分野に興味をお持ちの方は、どうか講師にも連絡して情報の入手や交換に協力して頂きたい。

参加者　金坂一郎、神崎忠男、小谷邦彦、坂本正智、三宅清子、佐藤知恵子、久村俊幸、三谷英三、堀内章雄、前田文彦、梅野淑子、斎藤かつら、高橋詢、千葉重美、小西奎二、中村純二

（中村純二）

のせいなのだろうか、それとも豊かな茶畑の濃緑色のゆえか、あるいは、初冬にしてはまばゆいほどの光のゆえか…。

なにはともあれ、二十五年もの長い間、一支部の行事として、この会合を続けてこられたことに、改めて深甚な敬意を表したい。

『十年とは驚きました。その間何度も紅葉を迎えたり、大間の変貌、井川奥の開発、梅ケ島の潰滅と蘇生、富士見峠みちの開通、有為転変。変らぬものは山好きの集まり』とは、いまは亡き日高信六郎さんが第十回目の集りに参加申込みをした際の添え書とのことであるが、「十年」を「二十五年」と読み換えて、さらに光を放つ名言といえよう。

三水会現地集会
十文字峠から三国峠へ

三水会恒例の奥秩父峠歩きシリーズ、今回は〝十文字峠〜三国峠〟を選び、去る十一月六、七の両日実施した。

梓山から戦場ケ原の一端にとりつくと田部重治さん紀行文に謳われた面影はなく、そこは広々と開けた高原野菜の畑である。収穫も終った今では黒々としている。

落葉松、白樺の林を進み、千曲川の水源を横切り、急坂を喘ぐと八丁の頭。奥秩父特有の原生林が美事であった。静寂な十文字峠へはほんの一投足。

十文字小屋では管理人の山中夫妻に暖かく迎えられた。有志は日没前に大山や、かもしか展望台を散策する。夕食前のひととき、管理人の松茸談義は面白かった。めずらしい〝ホテイラン〟のスライドも鑑賞。

この十文字小屋は昭和四十二年埼玉国体の折に新設されたものでがっちりした造りである。薪ストーブ、石油ランプは今どき貴重な存在であろう。

三国峠へは木立の濃い十文字山を越え、長野、埼玉の県境を辿る。長野側はおおむね山腹が開け、木立の深い埼玉側と対象的だ。時折石楠花の群生をかき分けるところもある。中津川の深い谷の向こうに両神山が怪奇な姿をのぞかせる。

幾度か登降を続け、梓白岩を過ぎたあたりで泣きだしそうな空がくずれ、本降りなった。

ひたすら三国峠に歩を進め、全員無事縦走を敢行、満ちたりた山行の幕を閉じた。

参加者　青木昇、坂倉登喜子、高橋晋作、菅野弘章、岩堀瑞子、小林由美子、高田真哉他十二名。

（高田真哉）

故秩父宮雍仁親王殿下三十年祭

去る一月四日午後二時三十分よ

追悼

永年会員・小島栄氏

（会員番号四五〇番）

近藤信行

昨年十月二十日、小島栄氏の訃報をきく。つづいて甥の緒方晃氏（小島烏水氏三男）からお手紙をいただいた。小生、療養中であったため、お住居の芦屋へかけつけることはできなかったが、黎明期の登山界を知る生き証人をうしない、悲しみに耐えなかった。

小島さんは明治二十二年七月二十九日、横浜の生れ、満九十三歳の天寿を全うされたわけだが、お若いときから野球や登山で足腰をきたえておられて、晩年にいたるまで、ともかくお元気だった。私は大阪へ行くたびに栄さんにお目にかかった。電話をして芦屋までまいりましょうかと言うと、毎日、大阪まで行っているからね、という返事がかえってきて、場所はきまって大阪倶楽部だった。関西財界人の集まるそこで、友人知己と四方山の話に時をすごし、あるいは図書室で静かに本を読んでおられるのだ。六甲山をわが庭のようにして朝の散歩を欠かさなかったという栄さんは、夕方ともなると、大阪倶楽部を出て、早足で梅田の阪急電車の乗り場へとあるいてゆく。その足どりは八十、九十の方とはとてもおもえなかった。

明治大学予科、第三高等学校に学び、京都大学へとすすまれた小島さんは、卒業後、住友にあって経済界で活躍されたわけだが、三高時代の剛球投手ぶりは、当時の一高・三高戦でいまでも語り草になっているほどである。また三高山岳会の創立委員のひとりであったことは『山岳』第八年第三号（大正二年十二月）所載の「三高山岳会主催講演会」からも察しがつく。その日は小川琢治、小島烏水、高野鷹蔵、辻村伊助らが演壇に立ったのだが、報告文のなかに「三高で或る運動選手をして居るため、一日も欠かさず、放課後は、グラウンドに出ている」と書かれているところからみて、その筆者は小島栄氏ではないかと推察できる。ともかく生まれながらのスポーツマンであった。

小島栄さんからいろいろとお話しをうかがってきたわけだが、私がもっとも印象づけられたのは、実に兄おもいの人であったことである。とぼしい家計のやりくりのなかで兄からの学資援助で学業をつづけられたこと、中学時代、兄に連れられて新雪の富士山（明治四十年十一月）に登り山岳に開眼したことなどをなつかしく語っておられた。明治四十一年には大井川からの白峰三山、大正のはじめには富士お中道めぐりと、兄・烏水氏と同行したときの想い出はつきせぬ様子であった。栄さんご自身では大正三年夏の鳳凰三山、北岳、間ノ岳、仙丈岳などの登山記を「野呂川の山と谷」（『山岳』第九年第三号）にまとめられたことがあるが、その記録は山と谷をあわせあるくという点で、おもしろいものであった。

昭和四十八年に日本橋・丸善で「近代登山の先駆者」展をひらいたとき、記念誌に原稿をお願いしたところ、冒頭から「御委嘱により賢兄・烏水について愚弟が一筆しよう。弟が他人さまに見てもらう文中、賢兄と書くことは不遜僭越至極なれど、烏水にかぎってあらゆる点にズバぬけた偉人とおもうので、かく御免を蒙る」とあったのには苦笑させられたが、つねに兄・烏水を語って下さったという点で、私にとって忘れがたい人であった。

草創期の日本山岳会の動きを横浜にあってみまもってきた方だけに、当時の山岳人の雰囲気を知

り、文京区にある豊島岡お墓所で故秩父宮雍仁親王殿下の三十年墓前祭が、厳かにとりおこなわれ、皇太子殿下、同妃殿下、浩宮殿下、各皇族方がご出席になった。多数の参列者に混じって、本会の関係者では三田幸夫、早川種三各名誉会員、渡辺副会長のほか数名の会員が参列し、拝礼した。（岡沢祐吉）

図書紹介

山の画文
—「岳人」の表紙の画と言葉—
辻まこと画・文

本に顔があるとしたら、どこであろうか。おそらくそれは、函でもなくカバーでもなく、また表紙や見返しでもない、扉ではなかろうか。とするならば、表紙や函その他は衣服にあたることになる。では雑誌の顔はどうか。とりもなおさず表紙であろう。形態面からのみ眺めれば、雑誌に前述の衣服をまとったものが本であるといえそうだからである。

本書は、一九七一年一月から著者が亡くなる寸前までの五年間、雑誌「岳人」の表紙を飾った五七号分の画と文章（途中病気のため五号分休載）をまとめたものである。画はすべて墨刷りで、号数順に文章と見開きに収めてある。また別に、原画からおこした多色刷りが八葉挿入されている。

巻末の解題によれば、画の収載にあたり、絵柄だけとするか、文字も活かして表紙そのままとするかで議論が分かれたようであるが、結果として後者を採用した。それは作者が表紙画として意識して描いたものだからだという。つまり作者は、前述の雑誌の〝顔〟を念頭においていたわけである。

表紙画はその一冊だけではそれほどでもないが、号を重ねて眺めていくと、その雑誌特有の〝顔〟が浮かび上ってくるものである。谷内六郎の「週刊新潮」しかり、杉山寧の「文芸春秋」平山郁夫の「海」などもその好例であろう。

本書の画を眺めていくと、山の稜線に誌名他の文字がかぶっているのがある。一瞬、もったいないと思う。作者の計算違いかとも思う。だが、頁を追うことによってそうでないことがわかる。この一連の画に山をモチーフとしていることは事実だが、作者の主題はむしろ岳人、つまり人間にあることに気がつくからである。

独特のマンガ風なタッチで描かれた人物の表情や動作のどれ一つをとっても、山好きの者なら誰もが覚えのあるものばかりである。そして、その人物の口からこぼれている最後の人でもあった。小島栄さんが亡くなって、私のなかの〝明治〟はますます遠くなってゆく。ひたすらご冥福を祈るのみである。

前田浩氏
（会員番号四〇三五番）

片山英一

昭和五十七年九月二十一日立山の千寿ケ原にある文部省登山研修所において全国登山研修施設協議会が開催され、神戸登山研修所々長である前田君はこの会議に参加、翌日室堂へ移動し現地視察ののち午前十時頃現地で解散となった。このあと同行した松本氏と二人で立山を縦走し剱御前の小屋で一泊した。翌二十三日剱岳頂上へ向かったが前剱頂上を越えたあたりで雨になったので引き返して来て剱山荘上方約四百㍍のあたりで突然心臓発作を起こし、数分後の十時二十分頃急逝した。大正五年生れ、六十五歳であった。兵庫県立第一神戸商業学校在学中は山岳部で活躍し、卒業後は嶺同人、神戸山岳会に属し、終戦後兵庫県山岳連盟設立に参画し理事長に就任し現在副会長、全日本山岳連盟理事のあと日本山岳協会理事、監事その他兵庫県、神戸市両体育協会の常任理事など数多くの団体の役職を兼任していた。神戸登山研修所の建設に奔走し、設立後はその所長となり兵庫県の登山団体の世話を一手に引き受けて忙しく活躍していた。その間昭和五十年にはネパール・ヒマラヤのP29登山隊、同五十二年にはアメリカのマウント・レーニヤ登山隊の隊長となって遠征した。また五十五年の秋ブータンヒマラヤのチョモラリーやツェルムカン山麓のトレッキングの隊長でもあった。心臓に欠陥があったなど夢にも考えられない元気さで、この度の事故は全く想像も出来なかった。文部大臣、環境庁長官、兵庫県知事、神戸市長、全日本山岳連盟、その他多くの団体から功労賞、表彰を受けている。まだまだ長生きして後進の指導と育成に当っ欲しかった。惜しい人を失ってしまった。（五七・一二・一〇）

チベット研究文献目録
日本文・中国文篇
（一八七七～一九七七年）
貞兼綾子編

B5判・上製　一四四頁　昭和五十七年五月　白日社刊　定価三八〇〇円　（小川益男）

この目録はチベット及びその周辺に関する日本文、中国文による著書、雑誌論文の目録で、薬師義美氏の「ヒマラヤ関係図書目録」と異なり、学術的な内容であり、しかも、雑誌論文を含めている。探検・旅行・登山を主とした薬師氏の目録のように、本会の会報に紹介するにはいささか分野がちがう気もするが、ヒマラヤ登山関係も付録として付けられたので（二十八ページ分）、やはり登山関係者にも興味のあるものにちがいない。

かつて十五年程前にチベット、中央アジア、モンゴルの日本文文献目録を作成したことのある筆者にはいささか感無量である。それは探検・紀行のみの文献であり、本書と比べると全く無価値に等しいが、若かりし情熱を想起し、本

書を前にして、強い感動を覚える。

内容は、総説、歴史、地理、経済・社会、政治・法制、宗教、科学、芸術、考古学・金石古文書学、民俗・民族学、言語・文字学などに分かれ、日本文三一八二（そのほか付録六七一）、中国文二六一九種を収めている膨大な目録であり、研究者にはたいへん役に立つものだと思う。

日本文はもとよりであるが、中国文の文献をまとめられたのは、特に重要である。いままでにも殆どその類をみないからである。いままで筆者などは「中国邊彊図籍録」などで、中国文の文献を知っていただけ、雑誌論文などについては全くの無智であった。日本文の地理関係の文献についてはそれほど目新しいものは見当らないが、中国文についてはどれもこれも手にとって読みたい文献が並んでいて、胸がときめく。

ざっとみて気が付いたのは、日本文で、本年の「この一本展」に筆者が紹介した「長谷川水哉遺稿集」が見当らない。長谷川隆諦の他の仏教論文が掲載されているのに残念である。また「山岳」に関することでいえば、成田安輝「進蔵日誌」の参考文献として掲げられた「大道」掲載の二つの記事が洩れているのは、現物がみつからなかったからなのだろうか。もう一つ、成田安輝についていえば、金子民雄氏の「埋もれた探検家・成田安輝」（「近世の学芸」掲載一九七六年）が洩れている。

それはさておき、索引は著者名索引が、日本人、中国人、欧米人などに分けられてあってじつに便利である。筆者も幾度となく参考にさせて頂く文献目録である。

一九八二年四月　亜細亜大学アジア研究所刊　B5判　三二八頁　六五〇〇円　（水野　勉）

神秘な国　ネパール
―女ひとりの冒険日記―

D・マーフィー著
中川　弘　訳

アイルランド女性の七ケ月にわたるネパール滞在記であり、チベット難民部落で奉仕した記録でもある。単なる旅行者の表面的な紀行から脱し、ネパールに溶け込み、日常生活やトレッキングの体験を、女性の目を通してキメ細かに生き生きと描いており、読んでいるとその感動が伝わってくる。

著者は一九六三年に六ケ月間インドでチベット人と生活を共にしたが、チベット難民の多くは西欧諸国の援助に感謝してもおらず、そんなチベット人に著者は幻滅の悲哀を感じながらも、チベット人社会で見出した彼らの勇気、ユーモア感覚、礼儀正しさが忘れられない。そして、「ポカラ渓谷に難民救済キャンプ設立」というネパ

日山協推せん状取得手続について

ネパールとパキスタンで登山を実施しようとする場合、推せん状の添付が必要な場合がある。

この推せん状の発行については、日本の場合、（社）日本山岳協会が行なっている。推せん状については、その発行システムを含めて改善の余地が多々あり、日山協・海外登山常任委員会を中心に、暫次実状に沿うよう改めつつあるが、今回は、これらのことを踏まえた上で、その発行手順について述べたい。なお、これは東京都山岳連盟を例として図の手順番号によって述べてある。

① 登山隊は都岳連と日山協に提出すべき書類をすべて揃えて同時に両事務局へ提出する。

② 都岳連では毎月十五日までに提出された計画について、まず、毎月最終火曜日に開催する海外委員会にて審議を行なう。この席上に登山隊から具体的な計画内容の全容を把握している隊長等に出席してもらい、質疑を行なう。事故防止を中心とした計画へのアドバイスが中心となる。

③ 同委員会で承認された計画は、翌月第一火曜日に開催される「常務理事会」で海外委員長の説明により審議される。

④ 都岳連常務理事会で承認された計画については、事務局にて都岳連会長名の日山協会長宛推せん状と誓約書が添付されて日山協事務局へ送付される。

⑤ 日山協では毎月第二火曜日に開催される海外登山常任委員会にて審議を行なうが、各岳連の審議を尊重して計画自体が余程ズサンか書類不備（笑えない話としてネパール政府へ提出するアプリケーションをパキスタン政府制定の様式で作成したまま日山協へ提出されたケースがあった）でない限り承認される。

⑥ 同常任委員会で承認された計画は、毎月第二木曜日に開催される日山協常務理事会で審議される。

※なお、以上四回の会議の日程は原則であり月によって変更される場合がある。

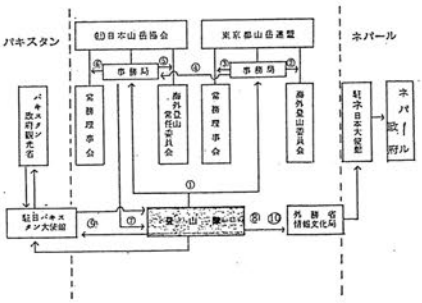
⑦ 日山協で承認された計画については、日山協会長名による「和文推せん状（外務省情報文化局長宛）」と「英文推せん状（相手国政府宛）」が交付される。

⑧ 登山隊はネパールの場合は、必要書類をたずさえて外務省情報文化局文化第二課（現在担当者は小菅吉治氏）を訪問して、英文登山許可申請書をネパール政府宛送付することを依頼する。（外務省側の要望により、書類提出に際しては隊長が訪問することになっている。また、あらかじめアポイントメントをとって訪問すべきであろう）

⑨ パキスタンの場合は、⑦までは全く同じであるが、推せん状が交付されたならば、まず、在日パキスタン大使館を訪問して、英文登山許可申請書を提出する。

⑩ パキスタン大使館が申請書を受理したら、その後、外務省（前述と同じ）を訪問して必要書類を提

推せん状の国内申請手順図解



ールのニュースを目にし、またそのキャンプにヨーロッパのボランティアがただ一人しかいないということで、再びチベット人社会へ入り込む。

インドから陸路でネパールに向かい、タイムトンネルを抜け出したような錯覚でネパールへの第一歩を標した。

カトマンズのバザールの雑踏の中を歩き寺院をめぐるとき、文明社会からの訪問者は、他の都市にない異国情緒と神秘さを感じる。

難民キャンプのあるポカラでは、ネパール人に好奇心を起こす。「床で眠ったり、小さな壊れやすいストーブで炊事をしたり、川で水浴したり洗濯することは良くない」とか、「少なくとも下働きに一人雇い、涼しい土間のある大きな家に移りなさい」と助言するが、ネパール人の水準、あるいはそれ以下の生活を「求めている」ヨーロッパ人が不自由な生活を彼らと共にしている事に現地人は面くらっている。だが、著者は不自由という意識はなく、むしろ階級意識の強い保守的な社会の人間模様を知ろうとしている。また、テントを流されたラマ僧に一部屋を提供し、チベット仏教（ラマ教）の心の一片を垣間見たり、チベット人との小旅行では、ナンキン虫やヒルの襲撃を受けながらも、バイタリティあふれる行動をしていて興味深い。帰国に先だつランタン谷へのトレッキングも冒険好きの著者なら、ヒマラヤの山懐に飛び込むのは当然と思う。

難民キャンプの診療所で奉仕活動をした著者は、物品的援助でなく難民自身が自活できるように援助すべきだと結んでいる。

本書を通して、ネパールやチベット人の異質の世界や、その国を知るだけでなく理解する案内書にもなっている。

一九八二年三月三十日発行　三二四頁　社会思想社・現代教養文庫　定価五六〇円（高本信子）

世界の秀峰

風見　武秀著

山岳写真のベテラン、日本山岳写真協会々長である風見武秀氏の世界の山岳写真集である。この十数年にわたって年間六ケ月のペースで海外取材を続けてきたという著者のエッセンスともいうべきものであろう。

カラコルム、ネパール・ヒマラヤ、アルプス、アンデス、カナディアン・ロッキー、アラスカ、ニュージーランド。アフリカとカメラを肩にした著者の足跡は世界のすみずみにまで及んで、六十枚の美しい写真がダイナミックに収められている。

何のけれん味もなく、それぞれの山の姿を、あるがままに、きわめてリアルに表現しているのが、この写真集の、というより著者の何よりの持ち味ではないかと思うし、それだけに感動を呼ぶのである。

巻末に地域別解説と一枚一枚の写真についてのコメントが付されてあり、あとがきで著者は「山の魅力に憑かれた男の旅が更につづくことであろう」と結んでいる。

昭和五十七年三月　中日新聞東京本社発行　一二三ページ　定価千八百円　ほかに豪華本あり

（山崎安治）

出する。

以上のとおり、登山隊が計画を進める中で必要な推せん状の取得については、毎月十五日までに全ての書類が都岳連に提出されていれば、ほとんどの場合は一ケ月で推せん状が交付されるのである。

（文責・山森欣一　都岳連海外担当理事・日山協海外登山常任委員）

ネパール登山に必要な手続き

一九八二・十二・一現在

◎推せん状交付申請に必要な書類（登山隊が用意するもの）

1　東京都山岳連盟提出分

一、海外登山推せん状交付申請書（所属団体代表者名・JAC会長名）　一通

※JACに加盟している団体はこの他に派遣する団体代表者名　一通

二、誓約書（登山隊長名）　一通

三、削除

四、和文計画書（所定の項目が盛込まれているもの・B5版）　二〇部

五、英文登山許可申請書（アブリケーション）コピー　一部

六、削除

2　（社）日本山岳協会提出分

一、海外登山推せん状交付申請書（登山隊を派遣する会の代表者名）　二通

※JACに加盟している団体は他にJAC会長名のもの　二通

二、誓約書（1と同じ）　二通

三、削除

四、和文計画書（計画の経緯・隊員の山行歴が盛込まれている）　二〇部

五、英文登山許可申請書（ビザ用写真をはったもの）本文　二部　コピー　三部

六、削除

3　外務省提出分（提出先・情報文化局文化第二課「担当官・小菅吉治氏」）

一、和文計画書　三部

二、英文登山許可申請書（アブリケーション）　本文　一部　コピー　二部

三、推せん状（和文・英文）各々（写）二通・正一通

四、書類送付についての依頼状（登山隊を派遣する会の代表者名）　一通

五、念書（登山隊長名）　一通

※一、二、三、については日山協がそろえてくれる。

（文責・山森欣一）

※日山協の推せん状交付手数料は二〇、〇〇〇円

都岳連の推せん状交付手数料は「直接加盟団体」は無料。間接加盟団体（JACに加盟している会はこれに該当する）は一〇、〇〇〇円

（以下次号）

・報告・

集会委員会主催　スケッチ山行

去る十月三十日（土）と三十一日（日）の二日間、集会委員会のスケッチ山行が河口湖で行なわれました。この催しは二年前から始まり、今回は三回目で、常連の方も多くなりました。

昨年ご一緒した方との再会を喜び、また初めてお会いする方ができたことも嬉しく感じました。講師をして頂く予定の清野先生が、個展準備のため出席して頂けなくなり残念でしたが、参加者の中で大先輩の鈴木正俊さんに代役をして頂きました。

昼食後、車に分乗して近くの山に出かけ、遠く下に河口湖が望めるところでスケッチすることになりました。向かいの山は全体が赤、橙、黄と華やかに紅葉し、麓

の村は穏やかな感じでした。

夕食兼懇談会は和やかな雰囲気のなか、テーブルを囲みワインで乾杯した後、フランス料理をいただきながら進行しました。ペンションのご主人は会員の浅田治男氏で、奥様と料理作りに腕を振って頂きました。このペンションは今年六月にオープンし、付近に生えているものなどを覚えてゆきたいとおっしゃっていました。皆さんから山の歌などが次々と出され、またこれからのスケッチ山行の場所の希望が話されたりで、懇談会は夜遅くまで続きました。

翌朝再び車に分乗して、河口湖畔へ写生に出かけました。くずれるという天気予報とは反対に晴天になり、富士山は全体が見え、頂の雪も多くて美しく、初冬の姿でした。一方湖畔のもみじは真赤に染まり鮮やかでした。富士山と湖は平板な絵になりやすく難しい対象でしたが、皆さんと話をしたりして楽しく写生をすることができました。十二時に集会委員会の方が用意された昼食を、湖畔から突き出た留守岩の上でいただき、お世話になったことに感謝しながら解散になりました。

十一月九日（火）、仕上げた作品をルームに持ちより批評会が行なわれ、清野先生に批評して頂きました。その中で先生は、絵は対象に義理立せず自分の思うように書いてほしいと話されました。そして作品は少しの間ルームに飾ることになりました。

私はこの催しに参加し、会員の方と親しくなってゆくことが何よりも嬉しいことでした。

参加者　榎本　進、山田靖子、池元善秋、白石栄三、鈴木正俊、三栖寿生、三宅次郎、西野喜与衛、上野英世、上野　操、中垣淑子、河村憲二、小池隆志、片岡泰彦、若林幸子、谷村久美代、神山良雄

（三栖寿生）

お知らせ

「山」合本、製本します

会報401号から450号の合本をご希望の方は、該当会報現物に、製本代と返送郵送料（計二七〇〇円）をそえて、一九八三年二月末日までに、日本山岳会本部事務局宛お送りください。

山岳映画と講演の会

日時　二月十五日（火）午後六時三十分より

場所　ルーム集会室（会員懇談会場）

講師　高橋　照　氏

談話　山岳記録映画のこと

映画　高橋氏の優秀作品二本（16ミリ）を上映します。

（フィルム委員会）
（総務委員会）

お知らせ

◎行事案内

☆スキー山行（万座）
一月二十九～三十日
婦人懇談会

☆三水会現地集会（竹寺）
二月十九～二十日
恒例の薬湯と山菜料理を探る集い。翌日はハイキング。

◎ルーム行事案内

☆海外委員会の講演会
○二月二日（水）
六時三十分より
「スイス山岳会について」
宮下啓三氏

○三月三日（木）
「長谷川恒男氏のお話」

☆新入会員オリエンテーション
三月二十六日（土）
集会委員会

☆定例集会
○会員懇談会
二月十五日、三月十五日

○三水会例会
二月十六日、三月十六日

◎第二十八回　山スキー講習会
指導委員会
期日は五十八年三月十九～二十一日の二泊三日（小屋泊）
場所は越後支部との共催で妙高高原を予定しています。
参加人数は三十名。
・各行事の問い合わせは各委員会、事務局、集会委員会まで。

第二十回「この一本展」の開催について

年次晩餐会でお馴染みの「この一本展」も、昭和三十七年深田久彌さんの発案で始まって以来、

志賀重昂生誕百年展（第二回）
高野鷹蔵氏を偲ぶ（第三回）
槍ヶ岳文献展（第四回）
明治百年山岳図書展（第六回）
エヴェレスト関係図書展（第八回）
深田久彌著作展（第十回）
武田久吉著作展（第十一回）
松方三郎著作展（第十二回）

等の特別展を含め、今回で通算二十回目を数えることとなりました。

図書委員会では、この第二十回を記念し、主として日本山岳会図書室にある洋書の古典・名著・稀覯書を中心とした「日本山岳会所蔵山岳図書展」を左記の通り開催することを決定しました。

なお、今回の特色として次の数点が挙げられます。

○晩餐会併設を止め、日本山岳会のルームで開催する。

○来観の便を計るため、土曜、日曜を含む三日間にわたる開催とする。

○展示本の解題、所有経緯などを記した目録を作成・頒布する。

また、期間中に「山岳図書を語る集い」の併催を予定しています（二月十九日（土）午後四時より山崎安治氏、山岳図書あれこれ）ので、併せてご期待下さい。

記

一、期間　昭和五十八年二月十九日（土）～二十一日（月）の三日間。但し、土、月は十三時～二十時、日は十二時～十八時

二、場所　本会ルーム

三、展示図書　日本山岳会所蔵の洋書を中心とするほか、適宜、出品を依頼

四、目録　当日頒布の予定

以上

図書委員会

お知らせ

「高所登山における雪崩遭難」についてのシンポジウム

主催　高所登山委員会、遭難対策委員会、指導委員会

一、期　日　昭和五十八年二月五日（土）
一五・〇〇～一八・三〇　シンポジウム
一八・五〇～二〇・〇〇　懇親会（会費一〇〇〇円）

一、発表者　長谷川良典、横山宏太郎、葦沢　剛、今野善郎

司　会　松永敏郎

総括責任者　金坂一郎

一、申込　日本山岳会事務局まで電話（二六一―四四三三）で申込んで下さい。その際、氏名、会員番号、懇親会出席の有無をはっきりとご連絡下さるようお願い致します。

（川上　隆）

ルーム日誌

（57年11月）

4日（木）青年懇談会
5日（金）科学研究委講演会
8日（月）理事会
10日（水）評議員会
11日（木）青年懇談会
12日（金）図書委員会
18日（木）青年懇談会、会報編集委
19日（金）科学研究委
25日（木）青年懇談会指導委
26日（金）フィルム委
29日（月）委員会連絡会議

今月の来室者423名

会員移動（11月）

物故

3684　二階堂政雄（9・2）

あとがき　この号を校了にしようとしていた十三日の夜、海外委の織田沢さんが、電話で記事の訂正を依頼して来た。運よく手元にゲラがあったり、日時だけの訂正だったので、何とか間に合った。

校了間際の訂正にも泣かされるが、先月号の大森さんの記事にもあったように、自分が行きたいところに行けないというのも悲しいことだ。この夜あった海外委主催の新年会で、ご馳走にありつきそこねたのもその一つだ。一度は私の親父が亡くなった日、初校のゲラがどさっと配達された。勤め先でさえ忌引き休暇があるのに、何てJACは冷いんだろう、と思っていた矢先、仲間の松家さんから快い応援の手が伸びた。会報担当者が一度は経験する日本山岳会の良さではないかと思った。（O）

会費を納入して下さい　事務局

昭和五十八年一月二十日発行
102 東京都千代田区四番町五―四 サンビュウハイツ四番町
発行所　社団法人 日本山岳会
発行者　佐々保雄
編集代表　岡沢祐吉
電話東京（261）四四三三
振替口座東京三―四八二九番
東京都港区赤坂一丁目三番六号
印刷所　株式会社 技報堂